

残暑の季節も過ぎれば、秋はすぐそこ。秋を彩る花といえば菊です。長寿や邪気払いを象徴する菊をまとわせた「菊人形」が各地で親しまれてきました。竹や木で組んだ骨格に菊の花を差し込んで衣裳に見立てる、異色の人形文化・菊人形とはどんなものなのか。調べてみました。

節句人形

素朴なギモン



国輝『当世菊見ノ図』古賀屋
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1307602>

秋には菊を見に出かけた、江戸の人々

菊人形は、菊の衣裳をまとった等身大の人形で、頭や手足は人形師が手がける。竹や木で組んだ骨格に菊の花を差し込み衣裳に見立てて制作される、日本独自の人形文化の一形態である。起源は江戸後期、染井や巣鴨（東京都豊島区）で盛んになった菊細工にさかのぼり、やがて人々に広まっていった。菊は古来、長寿や邪気払いを象徴する花として尊ばれ、その花卉をまとわせることで季節感と装飾美を兼ね備えた造形芸術として成立した。菊に親しむ風習は「重陽の節句」にも見られ、菊

人形はその延長線上に位置づけられる。

菊を鑑賞する「菊見」の風習は江戸初期に広まったが、やがて下火となり、幕末には再び盛んになった。こうした菊見ブームの復活とともに、菊人形は庶民の娯楽として支持を集めた。その後、明治から昭和にかけて全国各地で盛行し、地域の秋行事として発展を遂げた。代表例として福島県の「二本松の菊人形」があり、現在まで継続的に開催されている。また、関西では「ひらかた大菊人形」が知られ、地域文化の象徴的存在となっていた。

園芸師や人形師はもちろん、さまざまな職人の協働で完成

菊人形の制作には高度な園芸技術と人形制作の双方が求められる。まず、開花期を展示会期に合わせるため、栽培管理に緻密な調整が行われる。その後、人形師と園芸師が協働し、骨組みに一本ずつ菊を差し込み衣裳を形成する。花の色彩や配置によって人物像や物語の情景を再現するため、美的感覚と技術の融合が不可欠である。そのため、大道具師や小道具師、美術装置師、照明技師など、多くの職人が関わって作りあげられる。

昭和中期までは各地で大規模な菊人形展が催さ

れていたが、21世紀に入る頃から、労力や費用の負担に加え、娯楽や生活様式の変化もあり、次第に衰退を余儀なくされた。

それでも、二本松をはじめとする地域では今も開催が続けられ、秋の風物詩として親しまれている。有志による展示も減少傾向にあり、往年の賑わいは失われつつあるが、地域に残る催しは人々に秋の訪れを告げ、人形文化の奥行きを示す貴重な場となっている。